

## 「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

機 関 名	大阪大学	拠点番号	D 1 1
申請分野	人文科学		
拠点のプログラム名称 (英訳名)	インターフェイスの人文科学      Interface Humanities		
研究分野及びキーワード	<研究分野: 人文学>(倫理学)(芸術諸学)(世界史)(社会言語学)(文化人類学)		
専攻等名	文学研究科(文化表現論専攻、文化形態論専攻)、人間科学研究科(人間科学専攻)、言語文化研究科(言語文化学専攻)		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 鷲田 清一 教授      他 19名		

### 拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成16年1月現在)を抜粋

<本拠点がカバーする学問分野について>	哲学・倫理学、歴史学、比較文学、芸術学、社会言語学、文化人類学、文化社会学、日本・日本語学
<本拠点の特色及びその目的等>	環境危機、生命技術から介護・教育・コミュニティ・教育まで、現代社会が抱え込む問題は文化の根幹にかかわるものであるのに、人文諸科学がそれらの問題への取り組みに有効に答ええていない理由の一つに、国家や地域、言語圏によって分割された人文科学の縦割りの制度がある。本研究は、領域・地域横断的にかつ社会と多様な連繋が可能で人文科学の研究スタイルを確立することによって、時代の諸問題にアクチュアルに応えることのできるような21世紀型人文科学のあり方をデザインしようとするものである。
<COEを目指すユニーク性>	領域・地域横断的にかつ社会と多様な連繋を推進する人文科学研究への志向は、これまでも「学際的」、(複数文化の)「交流」、「共生」という名の下にいわば総合的に取り組まれてきたにとどまり、これら複数文化のインターフェイスをその接触面で、しかも「摩擦」や「衝突」、「軋轢」や「齟齬」のほうから照射する研究プログラム 横断的な知 と、専門家(研究者)と非専門家(市民)のインターフェイスを具体的に始動させる研究プログラム 臨床的な知 は、他に例を見ない。
<本拠点のCOEとしての重要性・発展性>	現代社会に特徴的な二つのディスコミュニケーション—複数文化の錯綜のなかで発生するさまざまな地域・国家間の軋轢と、専門家文化と市民文化の断絶—という問題に、具体的に取り組むなかで、人文科学の研究体制の柔軟な再編と、大学外の多様な知の場所との連繋、研究者と問題発生現場との接合とを図る。このことで「産学連携」に限定されない海外の研究者との、そして大学と社会との、活発な協働とコミュニケーションの回路を設計する。
<本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果>	1. 専門研究の砦に立てこもる文献型研究者ではなく、学科・地域・国家を超えた広い社会的視点に立ち、しかも社会の問題発生現場との接点を強くもちながら研究を進めるタイプの人文科学研究者の育成。2. 大学での教育プロセスと社会での活動をリンクさせる教育プログラムの構築。3. グローバル化の進行によって国家や地域のあいだでますます錯綜したかたちで発生しつつある文化的軋轢を分析するインターフェイス研究の集積と、それと連繋した国内外の先端研究のハブ化。
<背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等>	1. 現代社会が抱え込む困難な課題に協働して取り組む大学外の文化研究機関、NPOとのネットワークが形成される。2. このプログラムを通過することによって、自然系・社会系研究者のみならず、技術者・表現者が広い社会的・文化的視点をもって自身の研究課題を再設定できるようになる。3. 隣接していながら連携不十分な分野の多い、東・中央・東南アジア3地域の歴史・地域研究を結びつけるインターフェイスの場となりうる。

機 関 名	大阪大学	拠点番号	D 1 1
拠点のプログラム名称	インターフェイスの人文学		

#### 21世紀COEプログラム委員会における評価

##### (総括評価)

このままでは当初目的を達成することは難しいと思われるので、下記のコメントに留意し、当初計画の適切なる変更が必要であると判断される。

##### (コメント)

研究の構想が壮大であり、世界的にアピールできる理論構築を目指していることは評価できる。事例研究からモデル構築への移行も、実績が積み上げられている。しかしながら、国際会議等による外部への発信・交流活動が、学内における研究のまとまりを犠牲にするような頻度で遂行されてきたことは、拠点形成の達成に関して不安材料となっている。COEとしての拠点形成を達成するためには、理論構築と発信・交流活動に関わる時間・エネルギーのバランスに配慮し、当初計画の変更をされたい。また人材育成計画に関しては、全体経費に占める人件費の割合に見合った若手研究者による具体的成果の萌芽が現時点では顕在していない。COEとして理論構築しつつある理念モデルに依拠する方向で若手研究者の研究活動を推進するべきである。